様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４２４２００３

研究課題名（和文）啓蒙期におけるフィクション使用の多様な形態と機能に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive study in diverse forms and functions of the use of fiction in the Enlightenment

研究代表者
齋藤　渉（SAITO, Sho）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：２０３１４４１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　27,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、18世紀を中心とするいわゆる「啓蒙の時代」のヨーロッパを対象として、多様な形態で使用されたフィクションの諸事例を検討し、当時の政治的・社会的・文化的背景との関連で体系的に分析・考察する試みである。狭義の文学や演劇にかぎらず、宗教・形而上学・自然科学・法・政治などさまざまな領域で見られた虚構の対話・書簡・日記が、18世紀のコミュニケーション・プロセスのなかで担った意味や機能を解明するとともに、そうしたフィクショナルな言説に関する現在の諸理論を包括的に検討しつつ、思想史的研究に適用しうる概念的枠組を整理した。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to examine various forms of fictional discourse in 18th-century Europe and to investigate systematically into the roles they played in the political, social and cultural contexts of the Enlightenment. Fictional texts (dialogues, letters or diaries) were put into use not only in the realm of literature in a narrow sense, but also in a wide range of social fields such as religion, metaphysics, natural sciences, law and politics. Different types of fiction and their functions in the process of communication were discussed thoroughly, while the prominent contemporary theories of fiction were considered in order to attain an appropriate conceptional framework for a historiographical research of fictional discourse.

研究分野：哲学、思想史

キーワード：思想史　フィクション　啓蒙　18世紀

１．研究開始当初の背景

『岩波 哲学・思想事典』(1998 年）は「啓蒙思想」について、「いっさいを理性の光に照らして見ることで、旧弊を打破し、公正な社会を作ろうとした、主として 18 世紀に展開した知的運動」と定義している。たしかに、〈啓蒙〉の名で呼ばれる時代ないし思想が〈理性〉に結びつけられるのは、理由のないことではない。しかし、20 世紀後半以降、急激に進展した実証的研究は、さまざまな形で啓蒙の多面性を明らかにすると同時に、この時代を（理性であれ真理であれ）単純な概念によって規定することを著しく困難にした。他方、こうした実証的知見の蓄積は、歴史的概念としての啓蒙を精緻化するにとどまらず、むしろ、雑然とした（しばしば互いに矛盾するような）個別事例の集積に解消してしまう危険をも孕んでいる。

研究代表者は、啓蒙期を特徴づける雑誌等の定期刊行物が、通常考えられている以上にフィクショナルなテクストを含んでいることに着目した。理性や真理をかかげる〈啓蒙〉と、空想や虚構に結びつけられる〈フィクション〉の関係は、単に偶然的・付随的なものなのか？ それとも両者の間には、強い親和性や本質的関係があるのか？ こうした問いに明確な答えを出すことによって、上述の 2 つの問題、すなわち、啓蒙＝理性の時代とする単純化と、啓蒙概念が無数の個別事例に解消されてしまう危険を同時に回避しうるかもしれない。

２．研究の目的

本研究では、18 世紀を中心とする啓蒙期にみられた、さまざまな形態のフィクショナルな言説を包括的に調査し、その機能および意義を分析・把握する。フィクションは、狭義の文学テクストにとどまらず、政治・宗教・教育・科学・演劇・哲学など多くの領域で用いられた。この現象をシステマティックに考察することで、(1) 啓蒙期の思想において軽視されてきたフィクションの位置価を実証的に示すとともに、(2)〈啓蒙＝理性〉という依然として根強いイメージを克服・相対化することが、本研究の目的である。

３．研究の方法

啓蒙とフィクションの関連を考察するため、理論的研究と歴史的研究を並行して進めた。(1) 理論的研究では、フィクション概念の確定をおこなうとともに、歴史的研究のあつかう諸事例を分析する際の枠組を考案する。(2) 歴史的研究では、メンバーがそれぞれ啓蒙期におけるフィクションの事例を取り上げ、共同で討議する。

最初の 3 年間は、公開のワークショップやシンポジウムを開きつつ、理論的および歴史的研究を積み重ねるが、最終年度では、国際 18 世紀学会の大会で共同セッションを企画し、研究成果を報告する。

４．研究成果

本研究では、18 世紀のヨーロッパにおけるフィクション使用のさまざまな事例を取り上げ、その形態や機能を分析してきた（歴史的研究)。それと並行して、20 世紀に著しく発展したフィクション理論を検討しつつ、思想史的研究の基礎となりうる枠組を探求した（理論的研究)。

(1) 歴史的研究においては、数多くの個別事例をそれぞれの文脈に着目しながら考察し、フィクション使用の意図・動機（知識の伝播、興味喚起、モデルへの依拠、検閲の回避)、書き手の階層・職業、ジャンル・文体（書簡・対話・日記・小説)、媒体（書籍、舞台作品、雑誌、地下出版）などさまざまな観点から分析した。

分析を通して得られた知見は多岐にわたるが、考察時期全体にかかわる傾向として次のような仮説を立てることができるかもしれない。すなわち、当初は受け手（読者・観客）への影響・効果が比較的ナイーヴに考えられていたのに対し、次第により懐疑的・反省的な態度が強まっていくように思われる。

意図されていた効果（書き手のもつ信念が広く認められるなど）も、直接的な期待から読者・観客自身の批判や反省を誘発することに重点が移行し、それとともに、フィクショナルなテクストがより複雑化し洗練され、文体上の要求も次第に高まっていくという仮説が成り立ちうるだろう。フィクションとして始められたテクストが平板化したり、途中でフィクションの枠を放棄したりする事例も少なくないが、こうしたいわばフィクションからの撤退をともなう失敗例もこの点で興味を引く。

(2) 理論的研究においては、当初の考察の出発点であったサールの理論を継承しつつ、近年の研究に見られるより包括的・学際的な枠組への進展が、そのまま思想史的研究にも有用であることが示された。言語行為論の成果をふまえたサールの議論は、書き手（生産）から見たフィクションの構成を理解するうえで重要だが、演劇や絵画・彫刻などにはそのまま適用しがたい。

この難点は、ウォルトンの「ごっこ遊び」論のような受け手（受容）の側に着目した議論や、生産／受容の両者で共有される合意・慣習を強調するシェフェールやツィプフェルらの議論を加味することで回避しうる。おそらくこうした理論的展開を踏まえ、精緻化することで、18 世紀にしばしば見られる、判別困難なフィクション（明確なフィクション・マーカーなどを欠き、一見するとフィクションでないように思われるもの）の問題も解決できるだろう。

共同研究のメンバーは定期的に発表・討議の場をもち、知見と考察を深めていったが、初年度に日本ヘルダー学会でのシンポジウ

ム、第 3 年度は、日本 18 世紀学会での共同セッション、最終年度には国際 18 世紀学会（ロッテルダム）での共同セッションを実施した。また、ウーヴェ・ヴィルト教授（Universität Gießen）やヘンドリック・ビールス教授（Jacobs University Bremen）を招いて講演会を開催し、国際的な学術交流を図るほか、17～18 世紀におけるフィクション理論に関わる研究者を交えた研究会も多数実施した。

５．主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 28 件）

1. 菅利恵、レッシングにおける愛と正義、『ドイツ文学（Neue Beiträge zur Germanistik）』、152（2016）、17-33（査読有）
2. 上村敏郎、啓蒙期ハプスブルク君主国における書籍商ゲオルク・フィリップ・ヴーヘラーの宗教ネットワーク、『ドイツ学研究』、70（2016）、53-86（査読無）
3. 上村敏郎、啓蒙専制期ハプスブルク君主国における批判的公共圏の成立――フリーメイソン勅令をめぐるパンフレット議論に基づいて――、『クァドランテ』、18（2016）、145-155（査読有）
4. 隠岐さや香、簿記とシェイクスピア―「人文社会科学系批判」言説によせて、『現代思想』、54（2015）、240-247（査読無）
5. 近藤裕子・永井典克・大崎さやの、ヨーロッパ近現代におけるギリシア悲劇の女性像の変容（1）－イーピゲネイアー、『東洋大学人間科学総合研究所紀要』、17（2015）、107-118（査読有）
6. Sayano Osaki, Realtà e finzione nelle opere di Goldoni: sul tema della guerra、『地中海学研究』、38（2015）、49-65（査読有）
7. 大崎さやの、ダンヌンツィオの演劇とワーグナー――悲劇『フランチェスカ・ダ・リミニ』を中心に、『演劇学論集』、61（2015）、21-38（査読有）
8. 近藤直樹・宮坂真紀・大崎さやの・鈴木国男、イタリアの演劇とオペラにおける言語的地域性―ヴェネツィアとナポリの場合―、『演劇学論集』、60（2015）、115-140（査読無）
9. 大崎さやの、二つの『フランチェスカ・ダ・リミニ』をめぐって、『イタリア地中海研究叢書 1 ダンヌンツィオに夢中だった頃』、1（2015）、242-250（査読無）
10. 後藤正英、［書評論文］Edited and Translated by Martin D. Yaffe, Leo Strauss on Moses Mendelssohn, Chicago and London, the University of Chicago Press, 2012、『政治哲学研究』、15（2015）、105-114（査読無）
11. 菅利恵、啓蒙時代における愛と市民、『人文論叢』、32（2015）、29-42（査読無）
12. 武田将明、『トリストラム・シャンディ』と留保される名前、『群像』12 月号（2015）、72-111（査読無）
13. 斉藤渉、W. v. フンボルトと言語研究――デカルト派 vs. ロマン派言語学？、『あうろ～ら』（日本アイヒェンドルフ協会）、31（2014）、1-19（査読無）
14. 斉藤渉、［書評］宮谷尚実『ハーマンの「へりくだり」の言語――その思想と形式』［知泉書館 2013］、『日本 18 世紀学会年報』、29（2014）、103-105（査読無）
15. 隠岐さや香、一八世紀科学における『公共の福祉』と社会――パリ王立科学アカデミーと機械仕掛けの王、『現代思想』、42-12（2014）、186-191（査読無）
16. 隠岐さや香、歴史的事例からみる〈社会の中の科学〉十八・十九世紀の河川公共事業と科学の「理論」、『社会思想史研究』、38（2014）、9-23（査読無）
17. 久保昭博、レーモン・クノーあるいは口語文体の「民主主義的美徳」、『人文論究』、63（2014）、99-113（査読無）
18. 菅利恵、市民とフィクション――『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』試論、『希土』、39（2014）、2-27（査読無）
19. 菅利恵、読者としての役者――18 世紀の演技論と A. W. イフラント、『人文論叢』、31（2014）、61-72（査読無）
20. 斉藤渉、18 世紀の文学外的フィクション、『ドイツ啓蒙主義研究 13』（2013）、33-42（査読無）
21. 斉藤渉、［書評］脇阪豊、吉村淳一（編著）『メディア学小辞典』、『ドイツ文学論攷』、55（2013）、88-92（査読無）
22. 上村敏郎、一八世紀末ハプスブルク君主国における出版と統制――ウィーン書籍商ヴーヘラー廃業処理を例にして、『史境』、66（2013）、43-61（査読有）
23. 隠岐さや香、写真で読む研究レポート 科学アカデミーの誕生、『アステイオン』、78（2013）、4-9（査読無）
24. 武田将明、分人主義と小説の未来――平野啓一郎論、『新潮』、2013 年 9 月号（2013）、199-212（査読無）
25. 斉藤渉、［書評］Johannes Bronisch, *Der Mäzen der Aufklärung. Ernst Christoph von Manteuffel und das Netzwerk des Wolffianismus.*『日本 18 世紀学会年報』、27（2012）、81-82（査読無）
26. 上村敏郎、ヨーゼフ二世治下ハプスブルク君主国における「批判の自由」と言論紀律化――セーケイ事件をめぐるパンフレット騒動――、『社会文化史学』、55（2012）、51-81（査読有）
27. Toshiro Uemura, Die Öffentlichkeit zur Zeit Josephs II. am Beispiel der Wiener Broschüren. Informationsverbreitung im aufgeklärten Absolutismus, in: *Mitteilungen der Gesellschaft für Buchforschung in Österreich*, 2012-1（2012）、115-121（査読無）
28. 後藤正英、西谷啓治における神秘主義の問題、『理想』、689（2012）、51-61（査読無）

〔学会発表〕（計 51 件）

1. 上村敏郎、秘密結社ユニオンの残響――1794 年ウィーンの靴職人の瀆神事件再考、東欧史研究会、2016 年 3 月 12 日、大正大学（東京都豊島区）
2. 後藤正英、カントとメンデルスゾーンにおける啓蒙と宗教の関係、日本カント協会、2015 年 11 月 14 日、清泉女子大学（東京都品川区）
3. 斉藤渉、形式と質料 : J. ハリスと W. v. フンボルトの言語理論、関西コールリッジ研究会 第 167 回例会・特別講演会、2015 年 9 月 26 日、同志社大学 室町キャンパス（京都府京都市）
4. 久保昭博、日本近代文学における描写と視点――岩野泡鳴の理論的言説、Japan – Postmodern, Modern and Contemporary、2015 年 9 月 9 日、Dimitrie Cantemir Christian University (Bucharest/Rumania)
5. Sho Saito, “Public Use of Fiction”: A Typology of Fictional Discourse in the 18th-Century Germany. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
6. Masahide Goto, Functions of the Fiction in the Religious Controversy: On the Case of Lessing’s “Nathan the Wise”. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
7. Toshiro Uemura, The use of fiction in political pamphlets in 1780’s Vienna. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
8. Sayaka Oki, Fiction, mathematics, and doubt concerning Providence in the eighteenth century. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
9. Masaaki Takeda, Fiction and the Glorious Revolution: Providence in Defoe's Writings. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
10. Akihiro Kubo, Cultural and Social Functions of Fiction: Pragmatic Approach. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth- Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
11. Sayano Osaki, Reality and fiction in the works of Goldoni: Focusing on the theme of war. 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
12. Rie Suga, Contingency and Fiction: On Goethe’s "Wilhelm Meisters Lehrjahre". 14th International Congress for Eighteenth-Century Studies (International Society for Eighteenth-Century Studies). July 31, 2015, Erasmus University Rotterdam (Rotterdam/the Netherlands)
13. 武田将明、『重力の虹』と『ガリヴァー旅行記』第三篇：近代批判の円環、表象文化論学会 第 10 回大会、2015 年 7 月 5 日、早稲田大学（東京都新宿区）
14. 武田将明、注釈と反復 :『ガリヴァー旅行記』の意味作用、日本ジョンソン協会 第 48 回大会、2015 年 7 月 4 日、同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市）
15. 斉藤渉、W. v. フンボルトの〈教養〉概念―初期国家論を中心に、神戸大学文学部ドイツ文学専修主催特別ワークショップ、2015 年 3 月 27 日、神戸大学（兵庫県神戸市）
16. 菅利恵、正義か運命か―18 世紀家庭劇の展開をめぐる一考察、日本独文学会秋季研究発表会、2014 年 10 月 11 日、京都府立大学（京都府京都市）
17. 斉藤渉、日本の大学における教養理念と人間形成、獨協大学創立 50 周年記念公開シンポジウム「獨協大学とドイツ由来の教養理念―グローバル時代の人間形成と生涯学習を考える」、2014 年 9 月 20 日、獨協大学（埼玉県草加市）
18. 斉藤渉、道理と人格――天野貞祐の教育論における二つのアスペクト、獨協大学創立 50 周年記念公開シンポジウム「獨協大学とドイツ由来の教養理念―グローバル時代の人間形成と生涯学習を考える」、2014 年 9 月 19 日、獨協大学（埼玉県草加市）
19. 久保昭博、物語論と言語学的枠組み―藤井貞和の物語論をめぐって、European Association of Japanese Studies (EAJS)、2014 年 8 月 29 日、リュブリャナ大学（リュブリャナ／スロヴェニア）
20. 斉藤渉、啓蒙とフィクション、日本 18 世紀学会 第 36 回大会 共通論題 2「啓蒙とフィクション」、2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県福山市）
21. 久保昭博、フィクション使用の動態構造―近年のフランスにおけるフィクション理論の展開、日本 18 世紀学会 第 36 回大会 共通論題 2「啓蒙とフィクション」、

2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県福山市）
22. 大崎さやの、ゴルドーニ作品における「戦争」、日本 18 世紀学会 第 36 回大会 共通論題 2「啓蒙とフィクション」、2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県福山市）
23. 隠岐さや香、古典的確率論の描く人間像と哲学的フィクションの関係、日本 18 世紀学会 第 36 回大会 共通論題 2「啓蒙とフィクション」、2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県福山市）
24. 武田将明、名誉革命とフィクション：ダニエル・デフォーの場合、日本 18 世紀学会 第 36 回大会 共通論題 2「啓蒙とフィクション」、2014 年 6 月 22 日、福山市立大学（広島県福山市）
25. 久保昭博、ダンヌンツィオとフランス―デカダンスからモダニズムへ、ダンヌンツィオ生誕 150 周年記念展「ダンヌンツィオに夢中だった頃」、2014 年 2 月 15 日、京都大学総合博物館（京都府京都市）
26. 久保昭博、〈証言〉の誕生―第一次世界大戦戦争文学をめぐって、国際シンポジウム〈生表象〉の近代―自伝・フィクション・学知、2014 年 2 月 1 日、一橋大学（東京都国立市）
27. 久保昭博、戦時のフィクション―第一次世界大戦時におけるフィクション使用をめぐって、シンポジウム「フィクションと出来事」、2013 年 12 月 22 日、東京大学（東京都目黒区）
28. 武田将明、スウィフトの手、ガリヴァーの手、ガリヴァー旅行記の愉楽――訳者と注釈者による徹底討論、2013 年 12 月 1 日、西武池袋本店別館コミュニティ・カレッジ（東京都豊島区）
29. 斉藤渉、テクスト産出から見たフィクション―Frank Zipfel: Fiktion Fiktivität, Fiktionalität（2001）を読む、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 3 回会合、2013 年 11 月 9 日、東京大学（東京都目黒区）
30. 菅利恵、読者としての役者――A. W. イフラントの演技論、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 3 回会合、2013 年 11 月 9 日、東京大学（東京都目黒区）
31. 上村敏郎、啓蒙期の教育改革、教育史学会、2013 年 10 月 14 日、福岡大学（福岡県福岡市）
32. 上村敏郎、首都ウィーン―ウィーンとハプスブルク家、国際交流シンポジウム Willkommen Österreich! オーストリア三都物語、2013 年 10 月 7 日、信州大学（長野県松本市）
33. Masahide Goto, Das japanische Übersetzungsprojekt von Mendelssohns *Jerusalem*, Moses-Mendelssohn-Gesellschaft Dessau, 20. September 2013, Gemeindezentrum St.Georg（デッサウ／ドイツ）
34. 後藤正英、モーゼス・メンデルスゾーンとユダヤ啓蒙主義、京都ユダヤ思想学会、2013 年 6 月 22 日、同志社大学（京都府京都市）
35. 武田将明、平野啓一郎の文学と現代社会の共生、2013 年 UTCP-Yonsei 国際シンポジウム「共生と公共性 : 現場からの問い」、2013 年 6 月 14 日、延世大学（ソウル／大韓民国）
36. 上村敏郎、「半地下」のウィーン―18 世紀後半のハプスブルク君主国における書物の流通、日本 18 世紀学会、2013 年 6 月 13 日、一橋大学（東京都国立市）
37. 斉藤渉、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトと言語研究――デカルト派 vs. ロマン派言語学？、日本アイヒェンドルフ協会 2013 年度研究発表会、2013 年 5 月 26 日、東京外国語大学（東京都府中市）
38. 上村敏郎、啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるコミュニケーション・ネットワーク―いかにしてウィーンで禁書は流通していたのか―、日本西洋史学会、2013 年 5 月 12 日、京都大学（京都府京都市）
39. Sho Saito, Code durchschaubar/undurchschaubar: Zum Problem des „öffentlichen Gebrauchs“ der Fiktion in der *Berlinischen Monatsschrift*、日本独文学会第 55 回ドイツ文化ゼミナール、2013 年 3 月 29 日、リゾートホテル蓼科（長野県茅野市）
40. 斉藤渉、〈島〉の教育学的効用――J. H. カンペ『新ロビンソン』、日本ヘルダー学会シンポジウム「18 世紀における〈ロビンソン物語〉」、2012 年 12 月 16 日、アプローズタワー（大阪府大阪市）
41. 武田将明、D. デフォー『ロビンソン・クルーソー』（1719）、日本ヘルダー学会 シンポジウム「18 世紀における〈ロビンソン物語〉」、2012 年 12 月 16 日、アプローズタワー（大阪府大阪市）
42. 斉藤渉、フィクションの効用――敬虔主義・ゴットシェート・カンペ、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 2 回会合、2012 年 11 月 25 日、東京大学（東京都目黒区）
43. 後藤正英、啓蒙期宗教論のフィクション的言説について――レッシング『賢者ナータン』から考える、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 2 回会合、2012 年 11 月 25 日、東京大学（東京都目黒区）
44. Masaaki Takeda, Kenichiro Hirano, “Dividualism” and Atonement or How to Act after the Quake: Reading Novels by Keiichiro Hirano, Ian McEwan, Fuminori Nakamura, and Risa Wataya, UTCP The “UBI SUMUS” Series. 2012 年 10 月 26 日、東京大学（東京都目黒区）
45. Akihiro Kubo, Raymond Queneau ou les “vertus démocratiques” du roman parlant, Colloque international “Processus de démocratisation et moment vernaculaire des littératures”. 2012 年 10 月 25 日、ソルボンヌ大学（パリ／フランス）

46. Masaaki Takeda, Hiroko Ikeda, Ciaran Murray, To Islands, I: Odysseus, Gulliver, Oisin, IASIL Japan. 2012 年 10 月 7 日、明治大学駿河台キャンパス（東京都千代田区）
47. 隠岐さや香、科学と非科学――18 世紀欧州の『動物磁気』騒動からみえてくるもの、カルチュラルタイフーン広島、2012 年 7 月 15 日、広島女学院大学（広島県広島市）
48. 隠岐さや香、一八世紀のパリ王立科学アカデミーと科学の線引き問題――動物磁気と政治算術、関西フランス史研究会、2012 年 7 月 7 日、京大楽友会館（京都府京都市）
49. 斉藤渉、啓蒙とフィクション――共同研究に向けて、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 1 回会合、2012 年 7 月 1 日、ハービス PLAZA（大阪府大阪市）
50. 武田将明、啓蒙とフィクション：ダニエル・デフォーとスウィフトを中心に、科研費共同研究「啓蒙とフィクション」第 1 回会合、2012 年 7 月 1 日、ハービス PLAZA（大阪府大阪市）
51. 上村敏郎、居酒屋、職人、結社――18 世紀末ウィーンにおけるビアハウスの中の「公論」――、西洋近現代史研究会、2012 年 6 月 23 日、専修大学 神田キャンパス（東京都千代田区）

〔図書〕（計 13 件）
1. 斉藤渉、小澤卓也・田中聡・水野博子編『教養のための現代史入門』、ミネルヴァ書房（2015）、149-149/418
2. 斉藤渉、大浦康介編『日本の文学理論――アンソロジー（ベータ版）』、京都大学人文科学研究所（2015）、101-104/397
3. 久保昭博、森本淳生編『生表象の近代―自伝・フィクション・学知』、水声社（2015）、208-225/496
4. Akihiro Kubo 、Noriko Taguchi (éd.), *Comment la fiction fait histoire – Emprunts, échanges, croisements, Actes du colloque franco-japonaise organisé par le Département de langue et littérature françaises de l'Université de Kyoto (École doctorale des Lettres) en partenariat avec l'Institut franco-japonais du Kansai (Kyoto, 18, 19 et 20 novembre 2011)*、（2015）、225-238/354
5. 斉藤渉、宮田眞治・畠山寛・濱中春編『ドイツ文化 55 のキーワード』、ミネルヴァ書房（2015）、60-63, 64-67/286
6. 武田将明、冨樫剛編『名誉革命とイギリス文学：新しい言説空間の誕生』、春風社（2014）、313-363/397
7. 武田将明、石井久郎編『イギリス文学入門』、三修社（2014）、90-96, 100-119, 356-371/442
8. 後藤正英、『光華会宗教研究論集』第 4 巻、永田文昌堂（2013）、283-300/440
9. 武田将明、『文藝年鑑 2013』、新潮社（2013）、87-90/624
10. 富山太佳夫訳、原田範行編、服部典之、武田将明、『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈』、岩波書店（2013）、313 + 593 + 23
11. 久保昭博、大浦康介編『フィクション論への誘い』、世界思想社（2013）、124-144/328
12. 武田将明、『文藝年鑑 2012』、新潮社（2012）、89-92/638
13. 武田将明、平野啓一郎『ドーン』、講談社（2012）、644-653/656

〔その他〕
ホームページ等

科学研究費共同研究プロジェクト
「啓蒙とフィクション」：
http://www.usus-fictionis.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤 渉（SAITO, Sho）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：20314411

(2)研究分担者
後藤 正英（GOTO, Masahide）
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：60447985

久保 昭博（KUBO, Akihiro）
関西学院大学・文学部・准教授
研究者番号：60432324

隠岐 さや香（OKI, Sayaka）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：60536879

大崎 さやの（OSAKI, Sayano）
東京藝術大学・音楽学部・講師
研究者番号：80646513
（平成 27 年度：研究協力者→研究分担者）

菅 利恵（SUGA, Rie）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：50534492
（平成 25 年度：連携研究者→研究分担者）

武田 将明（TAKEDA, Masaaki）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10434177

上村 敏郎（UEMURA, Toshiro）
獨協大学・外国語学部・専任講師
研究者番号：20624662